

花嵐の剣

脚本 CineOps

第一稿

(これはサンプル脚本です)

時代設定：慶応三年(1867年)／京都・伏見・大坂

登場人物(主要)

杉田玄之介(げんのすけ・30)……主人公／市中の剣術道場「心明流」師範代

杉田さよ(25)……玄之介の妻／元武家の娘

杉田ちよ(7)……二人の娘

今津平八郎(48)……「心明流」宗家／玄之介の師

塩屋伊織(28)……玄之介の兄弟子／腕は一番

鹿島十四郎(22)……玄之介の弟弟子

蘆屋宗次(40)……薩摩脱藩浪士／玄之介の旧友

榊原主水(55)……徳川方・見廻組肝煎

榊原左近(24)……主水の嫡男

西郷久次(38)……薩摩藩士／蘆屋の同志

茶店の女・おりん(23)……伏見の茶店「柳屋」

町医者・藤川玄庵(60)

隠居老人・仙蔵(75)

幼年の玄之介(回想／10歳)

若きさよ(回想／17歳)

場所(ロケ地)

京都・心明流道場(外観／稽古場／母屋／玄之介の私室)

伏見・茶店「柳屋」

鴨川河原

祇園の町並み

二条城付近

大坂・蔵屋敷前

山中の街道（逃走シーン）

玄之介の生家・播磨国の田舎（回想）

戦場（伏見・鳥羽街道）

○1 京都・鴨川河原（早朝）

慶応三年秋。

川面に薄い霧。

遠く東山のシルエット。

白い稽古着の男・玄之介（30）、木刀で素振り。
一振り、二振り、三振り。裂帛の気合。

玄之介「セイツ！ セイツ！」

汗が額から落ちる。

○2 心明流道場・外観（朝）

町中の道場。

「心明流」の木看板。

塀越しに稽古の声。

○3 心明流道場・稽古場（朝）

板の間。

門弟二十名ほどが稽古。
年長から少年まで。

上座に宗家・今津平八郎(48)。

今津「杉田、組手の相手をしてやれ」

玄之介「はっ」

鹿島十四郎(22)が前に出る。

二人、木刀を構える。

礼。

斬り合いが始まる。

玄之介の動き、静かで、鋭い。

鹿島、受け続ける。

最後、玄之介が鹿島の右肩を軽く打ち、決着。

今津「そこまで」

○4 心明流道場・母屋(昼)

台所の土間。

妻・さよ(25)、昼食の支度。

七歳の娘・ちよ、框に腰掛けて見ている。

さよ「ちよ、お父さまに、お膳をお持ちして」

ちよ「はい」

ちよ、お膳を抱え、稽古場へ。

○5 心明流道場・玄之介の私室(昼)

六畳一間。

文机、刀掛け、書物。

玄之介、稽古着のまま、書を広げている。

ちよ「お父さま、お膳でございます」

玄之介「（振り向き）ちよ、ありがとう」

ちよ、お膳を置き、退がろうとする。

玄之介「ちよ」

ちよ「はい」

玄之介「父の絵を、見るか」

玄之介、引き出しから折り畳まれた絵図を出す。

故郷・播磨の田舎の景色。

ちよ「きれいでございます」

玄之介「……いつか、連れて行く」

○6 伏見・茶店「柳屋」（昼）

街道沿いの茶店。

縁台が四つ。

女将・おりん（23）、茶を運ぶ。

縁台の一つに、蘆屋宗次（40・薩摩脱藩）、頬被りをして座っている。
すげ笠を膝に。

遠巻きに、物見の者（薩摩藩士・西郷久次／38）。

蘆屋、茶をすする。

蘆屋「おりん殿、すまぬがな」

おりん「はい」

蘆屋「この書状を、心明流の杉田玄之介殿に」

蘆屋、懷から結び文を出す。

おりん「……はい」

○7 京都・町中（夕）

夕暮れの京の町。

浪人たちの一団が、提灯を掲げて歩く。

見廻組。

先頭は榊原主水（55）と息子・左近（24）。

主水「最近、脱藩浪士が京に増えておる」

左近「父上、幕府の威信、示すべきときと存じます」

主水「軽々に申すな」

○8 心明流道場・稽古場（夕）

稽古終わりの門弟たち、汗を拭く。

塩屋伊織（28／玄之介の兄弟子）、玄之介に耳打ち。

塩屋「玄之介」

玄之介「はい、兄貴」

塩屋「柳屋のおりんから、文が来ておる」

玄之介「……」

塩屋「蘆屋殿だ。懐かしからう」

玄之介、唇を噛む。

○9 玄之介の私室（夜）

夜。行灯。

玄之介、結び文を解く。

書面…「久しぶり也。会いたい。明日、酉刻、鴨川河原。蘆屋」

さよ、襖の前に立っている。

さよ「旦那さま」

玄之介「……さよ」

さよ「蘆屋さま、ですか」

玄之介「見たのか」

さよ「お見かけしました。（少し言いよどむ）

あの方は、薩摩を脱藩なさったと」

玄之介「うむ」

さよ「……お会いに、なるのですね」

玄之介「旧友だ」

さよ、しばらく沈黙。

さよ「ご無事で」

○10 回想・播磨国の田舎（昼）

幼い玄之介（10）と、少し年上の少年・蘆屋（15頃）。

野原で、木の枝を振って遊んでいる。

若蘆屋「玄、お前、強くなれ」

幼玄之介「うん」

若蘆屋「俺もな。強くなって、世の中、変える」

○11 鴨川河原（夕）

翌日、酉刻（夕方六時頃）。

河原に玄之介。

遠くに蘆屋。

二人、距離を詰める。

四、五間離れて止まる。

蘆屋「久しいな、玄」

玄之介「……十年ぶり、か」

蘆屋「俺は、薩摩を出た」

玄之介「聞いた」

蘆屋「幕府は、もうもたぬ」

玄之介「……」

蘆屋「お前の腕、俺たちに貸せ」

玄之介、首を振る。

玄之介「蘆屋、俺は、町道場の師範代だ。

門弟と、妻と、娘がおる」

蘆屋「知っておる」

河原の風が、二人の髪を揺らす。

蘆屋「考えてくれ」

蘆屋、背を向けて去る。

物陰から、榊原左近(24)が見ている。

○12 心明流道場・稽古場(夜)

夜稽古。

玄之介と塩屋の立ち合い。

激しい打ち合い。

竹刀ではなく木刀。

門弟たち、固唾を飲んで見守る。

最後、相打ち。

今津「そこまで」

塩屋「（息を切らしながら）……玄、お前、一段上がったな」

玄之介「いや、兄貴の方こそ」

○13 玄之介の私室（夜）

玄之介、独り、刀を抜いている。

切っ先を行灯にかざし、刀身を眺める。

玄之介「（ひとり言）……蘆屋、お前は、お前の道を」

襖の向こうから、ちよの寝言。

玄之介、刀を鞘に収める。

○14 伏見・茶店「柳屋」（朝）

朝の柳屋。

おりん、暖簾をかける。

玄之介、通りかかる。

おりん、会釈。

おりん「杉田さま、あの……」

玄之介「昨日、会ってきた」

おりん「（小声で）蘆屋さま、近頃、お命を狙われておられるようで」

玄之介「誰に」

おりん「見廻組と、薩摩の中でも、裏切り者と見る者が」

玄之介「……」

○15 二条城付近・町中（昼）

人通りの多い通り。

武士、商人、町娘、僧。

玄之介、歩いている。

前方に、見廻組の一団。

玄之介、横道へ避ける。

路地の奥、蘆屋が立っている。

蘆屋「玄、こっちだ」

○16 祇園・裏通り（昼）

裏通り。

蘆屋と玄之介、並んで歩く。

蘆屋「俺は、明後日、大坂に発つ」

玄之介「大坂」

蘆屋「薩摩藩邸から、同志が出る。迎えに行く」

玄之介「……護衛が要るのか」

蘆屋「お前には、頼まぬ」

玄之介「蘆屋」

蘆屋「ただ、もし俺が戻らなったら、この書状を、俺の国の、妹に届けてほしい」

蘆屋、薄い書状を渡す。

蘆屋「頼めるか」

玄之介「……それくらい」

○17 心明流道場・稽古場（夕）

玄之介、門弟の稽古を見ている。

鹿島十四郎、気合を入れて打ち込む。

鹿島「セイッ！」

玄之介「腰が浮いておる。もう一度」

鹿島「はいッ」

道場の入り口、誰かが立つ。

榊原左近（24）。

玄之介、振り向く。

左近「師範代・杉田殿、少し、お話が」

○18 心明流道場・外・縁側（夕）

縁側。

玄之介と左近、向かい合う。

左近「昨日、鴨川で、貴殿は脱藩者・蘆屋宗次と会った」

玄之介「……旧友ゆえ」

左近「幕府は、それを知っております」

玄之介「で、どうせよと」

左近「蘆屋の所在を、お教えください」

玄之介、首を振る。

玄之介「知らぬ」

左近「知らぬ、では通りませぬ」

玄之介「さて」

左近、少し視線を鋭くする。

左近「師範代殿、貴殿には、妻と娘がおられる」

玄之介、眉をひそめる。

玄之介「……脅しか」

左近「（わずかに笑う）そうはとられたくはないが、
時勢は、ご存知でしょう」

玄之介、黙って視線を外す。

○19 心明流道場・母屋（夜）

さよ、ちよを寝かしつけている。

玄之介、そこへ。

玄之介「さよ」

さよ「はい」

玄之介「明日、おぬしとちよを、播磨に、しばらく戻したい」

さよ「……なにか、ございましたか」

玄之介「うむ」

さよ、ちよの寝顔を見る。

さよ「わかりました」

玄之介「すまぬ」

○20 心明流道場・玄関（朝）

早朝。

さよとちよ、旅装束。

玄之介、玄関に立ち、見送る。

ちよ「お父さま、また」

玄之介「（かがんで）ちよ、母上の言うこと、よく聞いて」

ちよ「はい」

さよ、頭を下げ、出発。

玄之介、背を見送る。

路地の角を曲がるところで、さよが一度振り返る。

目が合う。

玄之介、軽くうなずく。

○21 山中の街道（昼）

街道。さよとちよ、歩いている。

人夫を一人、雇っている。

○22 心明流道場・稽古場（朝）

玄之介、門弟に告げる。

玄之介「今日から三日、稽古を休みとする」

門弟たち、ざわつく。

今津「玄之介、何があった」

玄之介「師、ご相談が」

○23 心明流道場・母屋（朝）

今津平八郎と玄之介、二人きり。

玄之介「蘆屋宗次、ご存知でしょうか」

今津「存じておる。お前の弟分だ」

玄之介「明日、大坂へ発ちます。

蘆屋の護衛を、いたす」

今津「……脱藩者に与するは、道場の名を落とす」

玄之介「承知しております」

今津「それでも、か」

玄之介「旧友を、見殺しにはできません」

今津、しばらく沈黙。

今津「……行ってまいれ」

玄之介「ありがとう、ございます」

今津「ただし、帰ったら、

道場の立て直しは、ちゃんとせよ」

玄之介「はっ」

○24 大坂・蔵屋敷前（昼）

大坂。薩摩藩の蔵屋敷前。

通りに、荷車。町人。

玄之介、頬被りをして、物陰から藩邸の出入りを見ている。

藩邸から、蘆屋と西郷久次（38）、もう二名の武士。

見廻組の張り込みが、遠くに見える。

玄之介、静かに尾行を始める。

○25 大坂・裏路地（昼）

路地で、見廻組が先回り。

蘆屋一行、挟まれる。

刀を抜く音。

玄之介、屋根の上から飛び降りる。

蘆屋の横に立つ。

蘆屋「玄！」

玄之介「話は、後だ」

○26 大坂・裏路地（昼／殺陣）

斬り合い。

見廻組8名と玄之介＋蘆屋＋西郷＋藩士2名。

玄之介、次々に相手を斬る。

刀の音、ぶつかる鋼。

西郷、腕を斬られる。

玄之介、背中を庇う。

見廻組、四名が倒れ、残りが退く。

蘆屋「助かった、玄」

玄之介「早く退け」

蘆屋と西郷、藩士二人、路地の奥へ逃れる。

玄之介、追っ手の目を引くため、別方向へ走る。

○27 大坂・川沿い（夕）

玄之介、走りに走る。

川沿いの道。

背後から、左近と見廻組の生き残りが追ってくる。

左近「師範代殿、そこまでッ」

玄之介、振り向く。

川端の船着場。

四人対一人。

○28 船着場・殺陣（夕）

夕焼け。

左近「玄之介。」

左近、若く早い。

見廻組の二人、先に玄之介に斬りかかる。

玄之介、受けて、返す。

一人を斬る。

左近、冷静に間合いを測る。

玄之介と一対一。

左近「流派は」

玄之介「心明流」

左近「（ふっと笑う）拙者は、天然理心流」

打ち合い。

鋼のぶつかる音。

川面に、夕日。

最後、玄之介が左近の小手を打つ。

左近、刀を落とす。

左近「……斬らぬのか」

玄之介「貴殿に恨みはない」

玄之介、背を向けて去る。

○29 茶店「柳屋」(夜)

京に戻った玄之介。

傷だらけ。

おりん、驚いて奥に招き入れる。

おりん「杉田さま！」

玄之介「すまぬ、しばし、匿ってくれ」

おりん、うなづく。

○30 柳屋・奥座敷(夜)

町医者・藤川玄庵(90)が呼ばれる。

玄之介の傷を診ている。

藤川「貴殿、運がよい。深傷ひとつも、急所を外れておる」

玄之介「藤川先生、蘆屋は、どうなった」

藤川「聞いておる。薩摩へ、無事、落ちたようだ」

玄之介、深く息を吐く。

○31 心明流道場・外観（朝）

道場、入り口に見廻組が張っている。

今津平八郎、外に出て応対。

今津「師範代は、昨日より行方知れずじゃ」

見廻組・一「嘘はいかぬ」

今津「嘘ではない」

○32 柳屋・奥座敷（昼）

玄之介、傷がまだ塞がらない。

おりん、粥を運ぶ。

おりん「塩屋さまが、お見えです」

塩屋伊織、入ってくる。

塩屋「玄、生きておったか」

玄之介「兄貴」

塩屋「今津先生は、しらを切っておる。

……が、見廻組、しつこい」

玄之介「ご迷惑を」

塩屋「一旦、京を離れろ」

○33 回想・若き日の道場（夏／昔）

若き日の玄之介（18）と、若きさよ（17／武家娘）。
縁側。

若さよ「……武士の、剣の道、怖ろしいですか」

若玄之介「怖ろしい。だが、守るべき人があれば、振るえる」

若さよ、少し頬を染める。

○34 鴨川河原（深夜）

深夜。河原。

玄之介、塩屋に連れられ、舟に乗る。

塩屋「大津まで、この舟で。

そこから陸路、播磨へ」

玄之介「兄貴、すまぬ」

塩屋「妻子を、迎えに行け」

玄之介、深く礼。

舟、暗い川を下っていく。

遠く、京の町明かり。

○35 播磨国・杉田の生家（朝）

田舎の茅葺き屋根の家。

さよ、縁側でちよと昼寝をしている。

ちよ、七歳のまま、すやすや。

庭先に人影。

さよ、目を覚ます。

玄之介、立っている。

さよ「……お帰りなさいませ」

玄之介「うむ。帰った」

ちよ、目を覚まし、駆けてくる。

ちよ「お父さまッ」

玄之介、抱きとめる。

裏山の紅葉が、鮮やか。

○36 山里・村道（昼）

数日後。村道。

玄之介、さよ、ちよ。

歩いている。

玄之介「しばらく、ここで畑でも耕すか」

さよ「お好きなように」

玄之介「（笑う）お前も、鍬、使うんか」

さよ「覚えます」

ちよ、先を走っていく。

紅葉、風に舞う。

○37 京都・心明流道場・稽古場（昼／後日）

京都、半年後。

明治を迎えた、新しい時代。

塩屋伊織が宗家代行として、門弟を指導している。

門弟の一人、新参者。

門弟「先生、『杉田玄之介』という方は」

塩屋「(稽古の手を止め、笑う)

それはな、伝説じゃ」

板戸の隙間から、秋の風。

○38 播磨国・田んぼ(夕)

夕焼け。

田の中、玄之介、鎌を持ち、稲を刈っている。

遠くから、さよとちよが握り飯を運んでくる。

さよ「お疲れさま」

玄之介「おう」

三人、畦道に腰を下ろす。

握り飯を頬張る。

ちよ「お父さま、剣、もうやらないの？」

玄之介「……やらぬ」

ちよ「なぜ」

玄之介「（しばし考え）鎌の方が、うまい飯が食える」

さよ、吹き出す。

玄之介も笑う。

ちよも笑う。

夕焼け、家族を赤く染める。

終